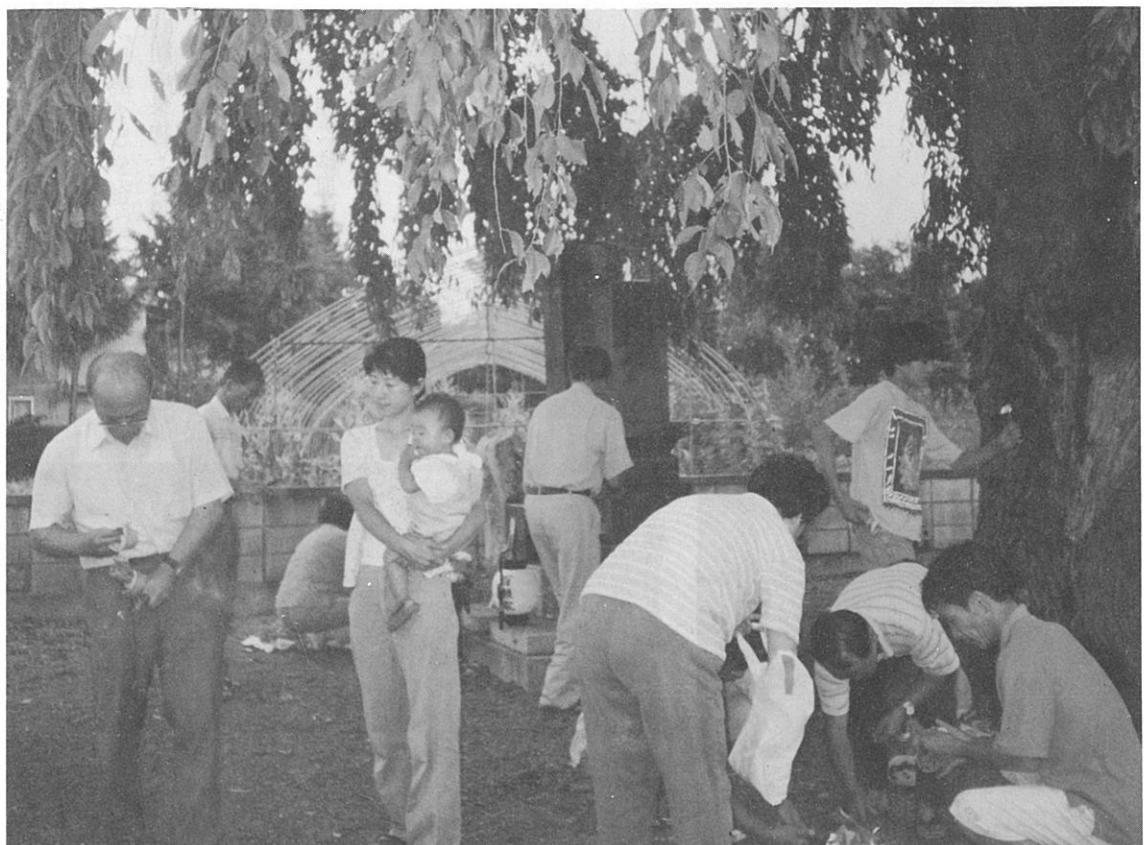


糸

車

編集 山形村ふるさと伝承館



## お 盆

うらばん  
盂蘭盆といい祖先の靈を

迎え送りしてその冥福を願う行事で、家々に精霊棚を設け亡き祖先の靈をまつる。

この時は家を離れていた息子、娘、そして孫が集まる。子供達は花火におおはしゃぎで、祖父母も孫の姿に目を細める。大人達は迎えた仏様と共に乾杯し、今は亡き者の追憶に思いをめぐらし祖先の尊さを語る。

# やまがたの年中行事 — お盆

## 盆棚飾り

一般の家では十三日に、新盆の家では七夕（八月七日）が済むと飾られる。炬燵やぐら二つを間をとつて並べ戸板を渡したり三尺棚を横にして板をのせたりした。棚の上には新しいゴザが敷かれ、仏壇の位牌がうつされ

時期の果物・野菜が供えられる。盆棚に飾られる盆花には、桔梗、女郎花、オトコ花、ススキ、萩などを野山から採ってきた。

また、棚には皿に水を入れみそはぎの小枝を浸したものをお供えたが、お参りの際、枝で水を降りかけたり、指に水をつけて拌りなどする所もある。



▲盆棚



▲盆花

## 宵盆

迎え火で仏様を迎えた盆棚には、お膳に御飯と汁をのせて供える。この日の夕飯には必ず鱒や鮭などの魚ものが食べられるが、食べなければ仏様に口を吸われると言われた。



▶迎え火の風景



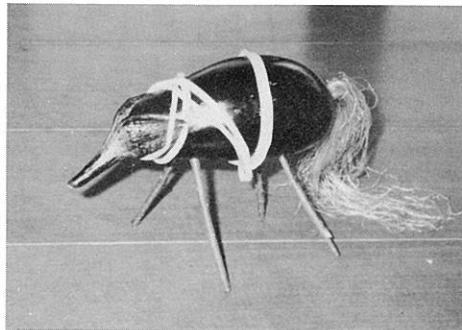
▲お墓そうじ

## 迎え火

カンバ・線香・迎え提灯を持って夕方皆で墓へ行く。カンバに火をつけ線香をあげ、提灯に火を入れて仏様をつれてくるが仏様を背負って家まで帰る。手を背へまわし背負ったまねをするわけであるが、途中で手をはなしてはいけないし、しゃべつてもいけないと言われた。家へつくと後ろをむいて「どっこいしょ」と言つて仏様を家へおろした。迎え火は墓でたく所、家でたく所と、地域・家によつても違ひがある。



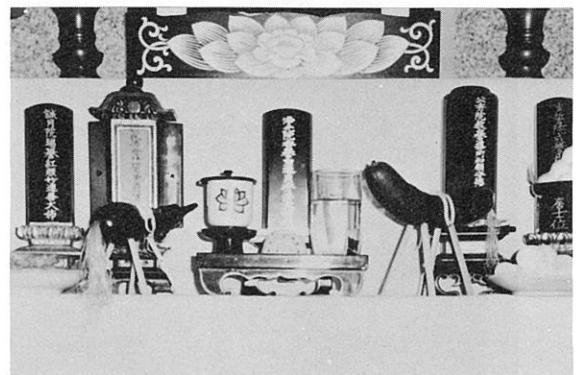
# 盆 中



盆は十六日迄であるが、十六日には棚上げをし送り火を行ふので、十四日・十五日が該当する。仏様が来ているのだからと盆棚には御馳走が上げられた。盆の楽しみとして子供は花火をし、大人は精靈をなぐさめる盆踊りをしたが、穴觀音や御嶽様の盆踊りは盛大の様であった。また、十五日には箸の足、もろこしの尻毛、うどんの手綱をつけた瓜や茄子の馬をつくつたがこれに仏様が乗つて帰るとか、お土産を乗せて帰ると言われている。

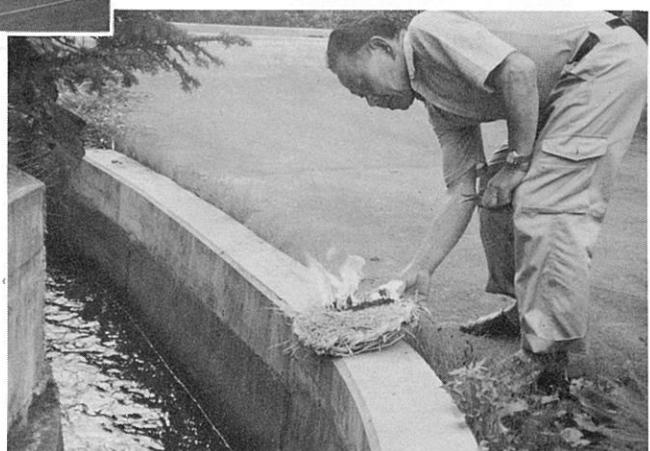
十六日の朝には盆棚を取りはらうが、供物は仏様のお土産として柏・南瓜・柿の葉などで包みワラでしばり、瓜や茄子の馬につけてやる。これらと供にゴザといつしょに川へ流した。となつては衛生上行なわくなつたが、昔は子供達が下流で待ち構えていて、流れてくるお菓子、果物などを拾つて食べたが、これを食べると虫歯にならないとも言われた。

## 棚上げ・お流し



## 盆 火

各家で迎え火、送り火をするだけでなく、子供達が麦ワラでつくつた松明に火をつけて振りまわした。十三日には迎え盆火を、十六日には送り盆火を行うが、上大池では堂の山で、下大池では今の大通りで行つたと言われている。



# 送り火

夕方盆提灯に火を入れ墓へ行き、線香・花・水をたむけて先祖の靈を送る。地域や家によつて違いもあるが家の表で火をいたり、墓の入口で火をたく所がある。また墓から帰る時に麦がらに火をつけてきて川へ流すという流し火をする所もある。子供が持つ提灯のあかりに郷愁をおぼえる送盆である。

## 夏の思い出 七夕から盆へ



▲ 笹に願いを



▲ 里芋の葉



▲ 七夕人形



▼ ▲ 夏の思い出スナップ

七夕からお盆にかけての十日余りは、どの世代にとつてもふるさとの思いにつながる楽しい期間である。

七夕は遠く奈良時代に中国から伝わった貴族社会の風俗だが、それとは別に民間では七月十五日を中心とする盆行事の一環として、伝承されて来たという。例えば、七日をナヌカビ・ナヌカボン・ハジメボンなどといつて、お墓の掃除をするとか、仮壇の道具を清めるなどのことをし、七日に笹を立てるのも、精霊の「依り代」としての意味がある。

あるともいわれている。

この日貴族達は「乞巧奠」と称して技芸の上達を星に祈つたが、民間では書道の上達を願い朝早く里芋の葉にたまつた露を集めで墨をすり、五色の紙に願いごとを書いて笹に飾りつける。この期間、天空の天の川を隔てて輝く二つの星、ひこぼし・おりひめの逢う瀬を思いながら大人たちは盆踊りに、子供たちは花火や度胸だめしにと、夏の夜を仲間たちと心ゆくまで楽しむのも、いつまでも残しておきたい習俗である。